広島大学教育実践研究指導センター紀要，1991，第3号，1－10頁

教員養成学部入学生の進路決定に関する研究

高橋　超・石原英雄・井上　弥・石井眞治・林　　孝

（1990年11月30日　受理）

問　　題

本研究は，広島大学学校教育学部に入学してきた学生の進路選択の過程，教職希望度を明らかにすることを目的として行なわれたものである。

昭和54年から開始された共通一次試験が平成元年にセンター試験に変更となり，この間，A日程，B日程，さらには分離分割方式など，国公立大学の入学試験制度は，目まぐるしく変化してきている。こうした中にあって，大学進学を希望する生徒に対する高校や予備校などの進路指導においては，校内での学力テストやセンター試験の成績などの学力成績のもつウェイトが大きくなり，適性や興味・関心といった成績以外の要因が関与する度合は，極めて減少してきている。

一方，出生数の減少に伴って，今後，小中学校教員としての就職もかなり厳しくなる状況下にあっては，教員養成系大学・学部は，大きな岐路を迎えつつある。すでに，大阪教育大学や愛知教育大学など，多数の大学においては，教員養成課程の学生定員を振り替えて，総合科学課程などといった，いわゆるゼロ免課程を併設してきている。さらにはまた，求人難という状況から，教員養成系大学・学部学生の民間企業への就職も増加の一途である。

こうした状況の中で，教員養成系大学・学部へ入学してきた学生がいかなる経緯で進路選択をしてきたか，さらには教職についていかなる意識を有しているかといったことを明らかにしていくことは，①教師教育カリキュラムの改善，②高校生や高等学校等に対していかなる大学情報を提供することが望ましいか，③青年期の人間の進路決定行動の解明，といった点で意義のあることである。

ところで，こうした問題については，すでに岩井勇児が愛知教育大学に入学してきた学生を対象にした一連の研究を行なってきているところである（岩井勇児，1979，1980，1981，1982，1984）。この研究では，入学した大学が第一志望であるか，入学の満足度や志望動機，さらには教職希望の程度などに関して詳細な調査を行い，教員養成系大学に入学してくる学生の進路意識の解明が試みられている。しかしながら，この研究では，教員養成系大学に入学した学生がいかに進路決定をしたかに関しては，必ずしも十分な検討がなされているものではない。

そこで，本研究では，本学部に入学してきた学生の進路決定過程を教職意識との関係から検討することを試みることとする。具体的には，①本学部への受験を決定した時期，②本学部への受験を決定するに際して手掛かりとした情報，③教職志望の程度，④教員適性の自己評価などに関して検討する。

方　　法

調査項目：岩井勇児が一連の研究で用いた質問項目を参考として，本研究では，以下のごとくの質問からなる調査票を作成した。

① 本学部の志望順位（受験した大学・学部名を第4順位まで回答を求めた）

② 本学部を受験の対象校として意識した時期（回答は，「高校2年生の5月ころ」，「1988年8月ころ」といったかたちで行なわせた）

③ 本学部への受験を最終的に決意した時期（回答は，上と同様のかたちである）

④ 本学部への受験を決定するに際して手掛か

りとした情報（「学校での定期試験や実力試験の成績」など，16項目を設定して，それぞれについて，参考とした程度を5段階で評定させた）

⑤　本学部への受験を決定するに際して重視したもの（「自分の希望する職業につけること」など5項目を設定し，それぞれについて重視した程度を5段階評」させた）

⑥　本学部への受験を決定するに際して必要とした情報（「自分の学校教育学部への合格可能性」など12項目を設定し，それぞれについて知りたいと思った程度を5段階評定させた）

⑦　本学部卒業生の就職状況についての理解度（「教員への就職が厳しくなることは知っていたが，教員になるためには本学部に入学することが最善だと思って受験した」など6項目を設定して，その中から一つを選択させた）

⑧　教職希望の程度とその理由（教師になりたい程度は7段階で評定させ，教職を希望する学生については，その理由を「自分の性格に向いているから」など11項目から2つを選択させた）

⑨　教員適性の自己評価（教職希望の程度は別として，どの程度教師に向いているかどうかを7段階で評定させた）

⑩　教員適性を判断する際に重視するもの（「自分の個性や性格」など10項目について，重視する程度を5段階評定させた）

被調査者：被調査者は，平成2年度に広島大学学校教育学部に入学した学生350人である。調査は，平成2年4月11日の学部ガイダンス時に配布し，自宅に持ち帰って，翌日に回収するという方法で行なった。なお，提出した者は340名であり，回収率は97.2%である。各課程，性別の内訳は，Table 1に示す通りである。

Table 1　課程，性別にみた回答者の内訳

	小学校課程	中学校課程	盲聾養課程	計
女子	63.3% (112)	44.9% (35)	82.9% (39)	61.8% (210)
男子	36.7% (79)	55.1% (43)	17.1% (8)	38.2% (130)
計	(215)	(78)	(47)	(340)

(　)内の数値は実数

結　　果

1．志望大学順位と志望校決定の時期

まず最初に，被調査者の大学志望順位と志望校をいつごろ決定したのかについて分析する。各課程別に志望順位パターンを示すと，Table 2のごとくになる。この表から，いずれの課程においても広島大学学校教育学部を第一志望とする者が圧倒的に多いことが明らかである。

Table 2　課程別にみた第一志望校

	広島大学 学校教育学部	広島大学 他学部	他大学 教育学部	その他
小学校課程	87.9% (193)	3.3% (7)	2.3% (5)	4.7% (10)
中学校課程	84.6% (66)	3.9% (3)	3.9% (3)	7.6% (6)
盲聾養課程	93.6% (44)	0.0% (0)	2.1% (1)	4.3% (2)
計	89.1% (303)	2.9% (10)	2.8% (9)	5.4% (18)

(　)内の数値は実数

次に，本学部を受験の対象校として最終的に決定したのはいつごろからについてみてみよう。回答は，「高校2年生の10月ころ」，あるいは「1988年12月ころ」といったかたちで求めたが，Table 3から明らかなごとく，いずれの課程においても，高校時代とする者が殆どである。そこで，高校時代と回答した者についてのみ，何年生の時かについて調べてみると，いずれの課程においても，高校3年生とする者が多いが，中学校課程と盲・聾・養課程において，高校2年生とした者が小学校課程よりは幾分多いようである（Table 4）。

Table 3　受験校の最終決定の時期

		高　校	その他
小学校課程	女　子	83.6%(112)	16.4%(22)
	男　子	75.9%(60)	24.1%(13)
中学校課程	女　子	74.3%(26)	25.3%(19)
	男　子	69.8%(30)	30.2%(3)
盲聾養課程	女　子	92.9%(36)	7.7%(9)
	男　子	75.0%(6)	25.0%(2)

(　)内の数値は実数

Table 4　受験校を決定した高校の時期

		高校１年	高校２年	高校３年
小学校課程	女子	2.7%(3)	4.5%(5)	92.8%(104)
	男子	3.3%(2)	1.7%(1)	95.0%(57)
中学校課程	女子	0.0%(0)	15.4%(4)	84.6%(22)
	男子	6.7%(2)	6.7%(2)	86.6%(26)
盲聾養課程	女子	5.6%(2)	11.1%(4)	83.3%(30)
	男子	0.0%(0)	0.0%(0)	100.0%(6)

(　)内の数値は実数

2．受験決定に際して手掛かりとした情報

本研究では，在学生を対象として受験を決定する際にどんな情報を手掛かりとしたかを自由記述させ，出現頻度の多いもの15項目を選択してそれぞれについて重視した程度を５段階評定させた。「非常に重視した」，「少し重視した」のいずれかに回答とした者を合わせた全体結果を示すと，Fig．1のごとくになる。この図から明らかなように，受験を決意する際に最も重要な手掛かりとなっているものは，「自分の興味や関心」，「大学入試センター試験の成績」，「高校の先生の意見やアドバイス」，「自分の性格や個性」の四つである。こうした結果から，学生の受験校決定に際しては，自己の内的情報（興味・関心，性格など）もかなり重要な手掛かり情報になっていることが窺える。

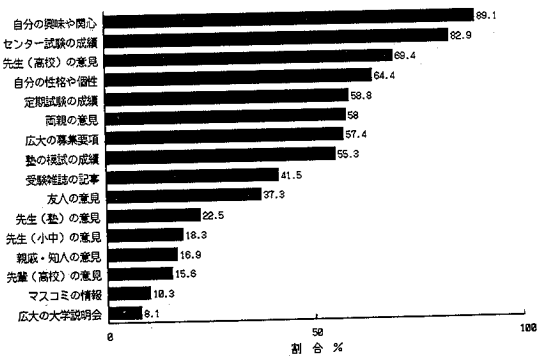

Fig 1　受験校決定に重視した情報

性別について分析してみると，いくつかの情報において重視の程度に差異が認められる。各課程別に顕著な性差が認められたものを示すと，Fig．2のごとくである。この図から，男子よりも女子の方が，定期試験や実力試験，さらには塾や予備校の模擬試験の成績，及び両親や親戚，友人などの意見やアドバイスといった情報をより重視していることが窮える。なお，「両親の意見やアドバイス」，「友人の意見やアドバイス」，「親戚や知人の意見やアドバイス」，「広島大学の募集要項」においては，盲・聾・養課程で女子よりも男子の方が重視する程度が高く，小・中学校課程とは逆の結果となっている。盲・聾・養課程の男子数が少ないこともあり，こうした結果を説明することは現段階では難しいが，興味のある結果である。全体的に言えば，受験校を決定する際に重視する手掛かり情報は，男子よりも女子の方が多いということである。

以上の結果は，受験生一般が受験校を決定する際に重視する手掛かり情報になるものとみてよいが，広島大学学校教育学部への受験を決定する際には，どんな情報を手掛かりとしたのであろうか。五つの項目を用意して，それぞれについて重視した程度を５段階評定させた。「非常に重視した」，「少し重視した」を合わせた全体結果を示すと，Fig．3のごとくになる。この結果から明らかなように，本学部を受験するに際しては「自分の希望する職業につけること」，「学部の特色が自分の興味・関心に合っていること」の方が，入試の難易度や受験科目以上に重要な手掛かりになっていることが明らかである。

性別では顕著な差異は認められなかったが，課程別にみると，小・中学校課程と盲・聾・養課程の間にいくつかの項目で重視した程度に差異が認められた。「自分の希望する職業につけること」では，盲・聾・養課程の学生の方が小・中学校課程の学生より重視する程度が強く（盲・聾・養課程，93.6%：小学校課程，87.4%：中学校課程，87.1%），同様の傾向は，「学部の特色が自分の興味・関心に合っていること」においても認められた（盲・聾・養課程，80.8%：小学校課程，70.7%：中学校課程，62.8%）。逆に，「受験科目が自分の不得意科目でないこと」では，盲・聾・養課程の方が小・中学校課程よりも重視する程度が低い傾向にあった（盲・聾・養課程，48.9%：小学校課程，60.5%：中学校課程，67.8%）。

以上の結果を総合すると，本学部に入学してきた学生は，受験を決定する際には自分の興味・関心，さらには将来の職業選択などを重要な手掛か

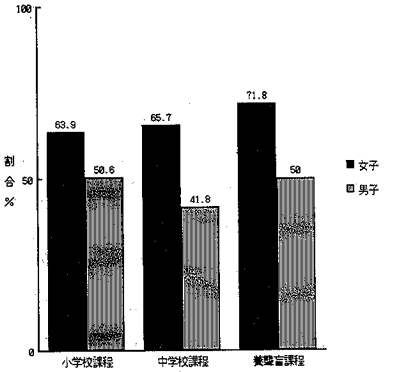

Fig 2a　課程，性別にみた重視する手がかり情報(定期・実力試験の成績)

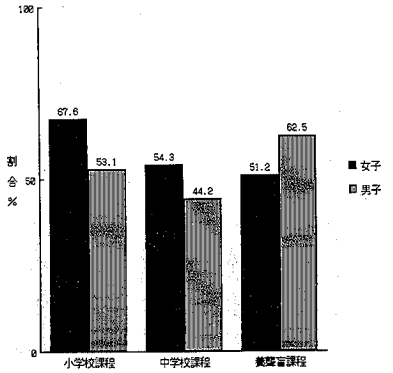

Fig 2b　課程，性別にみた重視する手がかり情報(両親の意見やアドバイス)

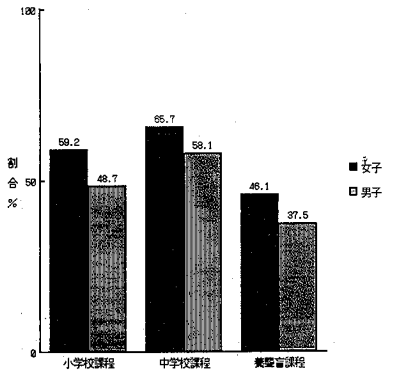

Fig 2c　課程，性別にみた重視する手がかり情報(塾・予備校の成績)

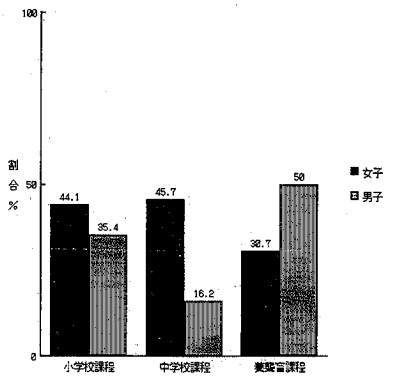

Fig 2d　課程，性別にみた重視する手がかり情報(友人の意見やアドバイス)

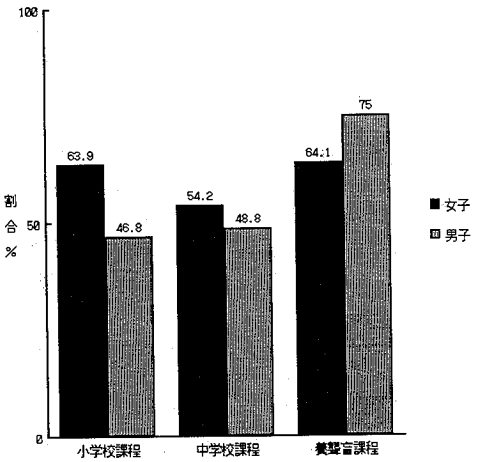

Fig 2e　課程，性別にみた重視する手がかり情報(高校の先生の意見やアドバイス)

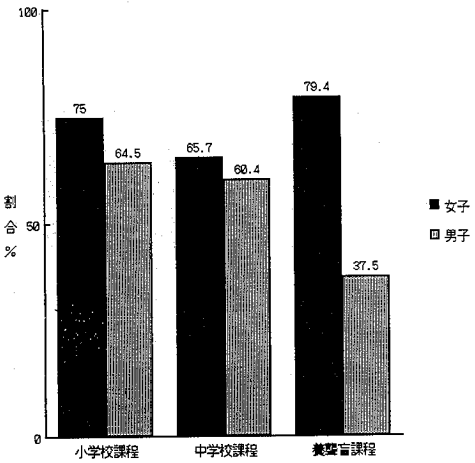

Fig 2f　課程，性別にみた重視する手がかり情報(広島大学募集要項)

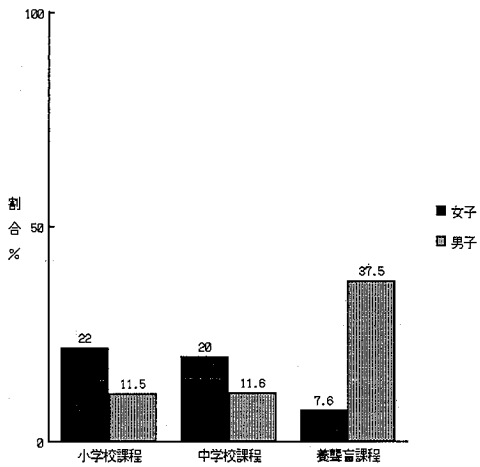

Fig 2g　課程，性別にみた重視する手がかり情報(親戚・知人の意見やアドバイス)

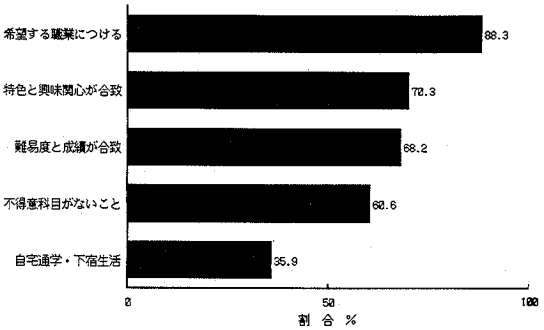

Fig 3　広島大学学校教育学部受験に際して重視したもの

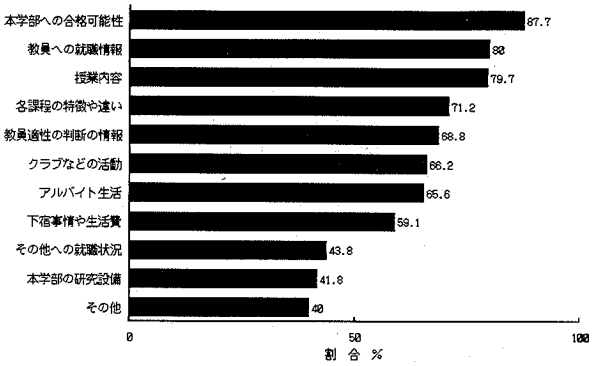

Fig 4　広島大学学校教育学部受験に際して知りたい情報

り情報としており，一般に言われているほど成績情報のみで受験校を決定しているとは言いがたい。

3．受験を決定するに際して知りたい学部情報

本学部に入学してきた学生が，本学部への受験を決定するに際して，どんな学部情報を詳しく知りたいと思ったかを明らかにすることは，今後，受験生に対して大学・学部案内や大学・学部説明会などにおいて大学・学部がどんな情報を提供したらよいかを考えていく上で意味のあることと思われる。そこで，在学生を対象とした予備調査で詳しく知りたいと思った学部情報を自由記述してもらい，出現頻度の多いもの11項目を選択してそれぞれについて，知りたいと思った程度を5段階評定させた。「非常に詳しく知りたいと思った」，「少しは詳しく知りたいと思った」のいずれかに回答した者を合わせた全体結果は，Fig. 4に示す通りである。最も知りたいと思った情報が「学校教育学部への合格可能性」であることは，受験生の心理からみれば当然のことと言えよう。それ以外では，「学校教育学部卒業生の教員への就職状況」，「学校教育学部の授業内容」，「学校教育学部の各課程の特徴や違い」などに関する情報が求められているようである。

課程別，性別についてみると，いくつかの項目で知りたいと思う程度に差異を認めることができる。課程別の差異としては，「合格可能性」については小学校課程が最も望む程度が高く（90.2%），盲・聾・養課程が最も低くなっている（78.7%）。「自分の教師としての適性が判断できる情報」では，逆に盲・聾・養課程の学生の方が小・中学校課程の学生よりも知りたいとする者が多くなっている（盲・聾・養課程，78.7%：小学校課程，69.3%：中学校課程，61.5%）。同様の傾向は，「課程の特徴や違い」についても認められる（盲・聾・養課程，85.1%：小学校課程，68.4%：中学校課程，70.5%）。

男子と女子の間に差異の認められたものは，Fig. 5に示すように，「教員適性が判断できる情報」，「学部の授業内容」，「卒業生の教員への就職状況」の三つである。これらは，いずれも男子よりも女子の方がより詳しく知りたいとする情報である。現段階でこの結果を一般化するには問題があるが，男子よりも女子の方が卒業後の職業選択（教員への就職）にかかわる情報をより詳しく求めていることが窺える。

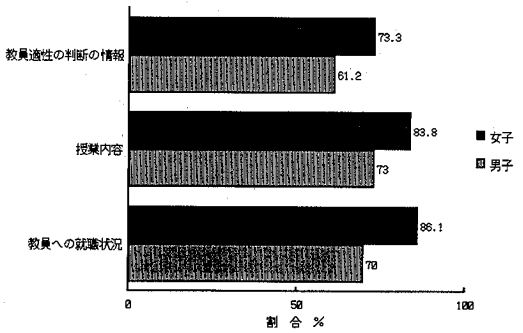

Fig 5　広島大学学校教育学部受験に際して知りたい情報(男女差の見られたもの)

4．学校教育学部卒業生の教員就職状況情報についての理解度

児童数の減少に伴って，教員養成系大学・学部学生の教員への就職が，年々，厳しくなってきていることは，新聞や雑誌などによって流布されて

いるところである。こうした情報は，本学部のみならず教員養成系大学・学部を受験しようとする学生に少なからずの影響を及ぼすことが予想される。そこで，本研究では，本学部に入学してきた学生が，本学部への受験を決定する際にこうした情報をどの程度理解していたか，また，そのことが受験動機にどんな影響を及ぼしたかを調べてみた。あらかじめ用意した選択肢から，最も該当するものを一つ選択させたところ，Table 5のような結果が得られた。この結果から，本学部卒業生の教員への就職が厳しくなっていることは，受験段階でほとんどの学生が理解し，そのことが本学部への受験決定に大きな影響をもっていないことが明らかである。

Table 5　学校教育学部卒業生の教員就職状況についての理解度

	小学校課程 女子	小学校課程 男子	中学校課程 女子	中学校課程 男子	盲聾養課程 女子	盲聾養課程 男子	全体
教員になるには本学部に入学するのが最適	64.7% (88)	59.5% (47)	62.9% (22)	58.1% (25)	79.5% (31)	62.5% (5)	64.1%
教員への道もあると受験	19.9% (27)	25.3% (20)	14.3% (10)	23.3% (10)	7.7% (3)	12.5% (1)	19.4%
受験と就職のことを結びつけないで受験	5.8% (8)	10.1% (8)	11.4% (4)	16.3% (7)	5.1% (2)	25.0% (2)	9.1%
本学部受験の際とても迷った	5.8% (8)	1.3% (1)	5.7% (2)	0.0% (0)	2.5% (1)	0.0% (0)	3.5%
教員への就職の厳しさを知らなかった	0.0% (0)	1.3% (1)	2.8% (1)	2.3% (1)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.9%
そ　の　他	3.6% (5)	2.5% (2)	2.8% (1)	0.0% (0)	5.1% (2)	0.0% (0)	2.9%

（　）内の数値は実数

性別についてみると，男子も女子も，本学部卒業生の教員就職状況が厳しくなっていることは認知しているが，受験動機にいくらかの違いを認めることができる。顕著な差異としては，いずれの課程においても，「教員になるためには，本学部に入学することが最善である」とする者が男子よりも女子に多い。それに対して，「教員への就職の道もあると思って受験した」とする者は，男子の方が多くなっている。こうしたことから，男子のほうが女子よりも，流動的な卒業後の進路計画を立てていることが窺える。

5．教職志望度と志望する学校

以上の分析から，本学部に入学してきた学生の多くが教員への就職を志向していることが示唆されるが，実際にはどの程度の志望を持っているのであろうか。教員志望度を7段階で評定させた結果を示すと，Table 6のごとくである。この結果から，「是非ともなりたい」，「できることならなりたい」，「どちらかといえばなりたい」のいずれかに回答した者を合わせると，回答者339名中，287名（84.7%）となり，教員への志望度が圧倒的に強いことが明らかである。

Table 6　教職志望度

	%
是非ともなりたい	53.1 (180)
できることならなりたい	22.7 (77)
どちらかといえばなりたい	8.8 (30)
どちらともいえない	11.8 (40)
どちらかといえばなりたくない	1.5 (5)
あまりなりたくない	1.2 (4)
まったくなる気はない	0.9 (3)
計	100.0 (339)

各課程，男女別について「なりたい」とする者の比率を示すと，Fig. 6のようになり，いずれも課程においても男子よりも女子の方が教職志望度が強いようであるが，特に，中学校課程と盲・聾・養課程においては，こうした傾向が顕著に認められる。

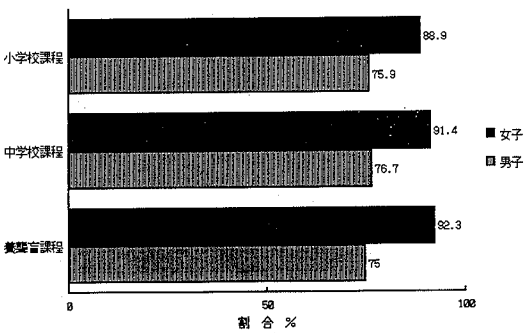

Fig 6　課程，性別にみた教職志望度

次に，教職を希望する学生についてのみ，教師への就職を意識したのがいつごろの時期であるかを調べてみた。その時期を自由記述させ，それに基づいて，「小学校の時期」，「中学校の時期」，「高校の時期」，「その他（予備校など）」に分類し，その結果を課程，性別に示したものがTable 7である。全体的にみれば，高校時代に意識したとする者が多いが，この傾向は，盲・聾・養課程の学生に顕著である。

Table 7　教職志望を意識した時期

		小学校	中学校	高校	その他	計
小学校課程	女子	48.7%(57)	18.8%(22)	30.0%(35)	2.5%(3)	(117)
	男子	22.4%(13)	20.7%(12)	51.7%(30)	5.2%(3)	(58)
中学校課程	女子	32.3%(10)	38.7%(12)	29.0%(9)	0.0%(0)	(31)
	男子	9.4%(3)	46.9%(15)	43.7%(14)	0.0%(0)	(32)
盲聾養課程	女子	19.4%(7)	19.4%(7)	58.3%(21)	2.9%(1)	(36)
	男子	0.0%(0)	16.7%(1)	66.7%(4)	16.7%(1)	(6)
		32.2%(90)	24.6%(60)	40.4%(113)	2.8%(8)	(280)

(　)内の数字は実数

性別にみると，男子と女子ではかなりの差異が存在する。男子よりも女子の方が教職への就職を意識した時期が早く，この傾向は，小学校課程の女子に特に顕著である。

次に，教職を志望する学生がどんな学校の教師に就くことを望んでいるのかについて分析してみる。各課程，性別の結果を示すと，Table 8 のごとくになる。なお，ここで「その他」のカテゴリーには，盲・聾・養護学校を含んでいる。

Table 8　課程，性別にみた志望する学校

		幼稚園	小学校	中学校	高校	その他
小学校課程	女子	0.8%(1)	85.5%(100)	7.7%(9)	5.9%(7)	0.0%(0)
	男子	1.7%(1)	77.6%(45)	17.2%(10)	3.5%(2)	0.0%(0)
中学校課程	女子	0.0%(0)	3.1%(1)	50.0%(16)	46.9%(15)	0.0%(0)
	男子	0.0%(0)	3.1%(1)	71.9%(23)	25.0%(8)	0.0%(0)
盲聾養課程	女子	0.0%(0)	22.6%(7)	3.2%(1)	0.0%(0)	74.2%(23)
	男子	0.0%(0)	33.3%(2)	0.0%(0)	0.0%(0)	66.7%(4)

(　)内の数字は実数

この表から，小学校課程と盲・聾・養課程の学生は，自分の課程と一致する学校の教師に就くことを望んでいることが明らかであるが，興味深いことは，中学校課程の女子で，高校の教師に就くことを希望する者が半数近く存在するということである。このことは，中学校課程の場合，男子よりも女子の方が教科専門志向が強いことを示唆するものともいえよう。

6．教員適性の自己評価

教職に就くことを希望するかしないかは別として，入学してきた学生が，どの程度自分が教師に向いていると判断しているかのかについて調べてみた。向いているかどうかを7段階で評定させたところ，Fig. 7 のごとくになる。この図から，自己の教員適性を否定的に評価している学生は極めて少ないことが明らかである。

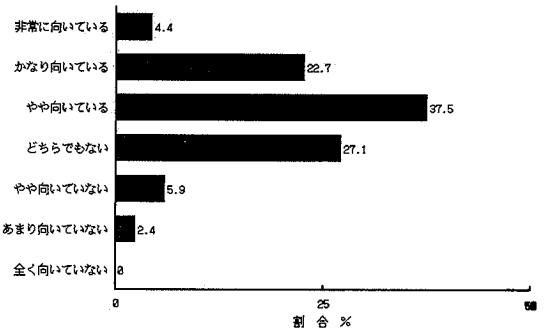

Fig 7　教員適性の自己評価

課程，性別についてみると，顕著な差異は認められないが，小学校課程，盲・聾・養課程の学生よりも，中学校課程の学生に自己の教員適性を肯定的に評価している者が幾分少なく（小学校課程，66.9%：盲・聾・養課程，63.1%：中学校課程，58.9%），また，中学校課程の男子の方が女子よりも低くなっている（男子，55.8%：女子，62.9%）。

7．教員適性判断次元

最後に，教員養成系学部に入学してきた学生が自分の教職への向き，不向きを判断する際にどのような判断次元を用いているかについて検討してみる。本研究では，10個の次元を設定して，それぞれについて，教員適性判断において重視する程度を5段階評定させた。「非常に重視する」，「かなり重視する」のいずれかに回答した者を合わせた全体結果を示すと，Fig. 8 のごとくになる。それぞれの次元毎に評定させたために，全体としては，いずれの次元においても重視するとする者が多いが，最も重要な判断次元は「自分の個性や性格」，ついで「子どもに対する好き嫌い」であり，「創造性や独創性」，「話し方のうまさ」などはそんなに重視されていないようである。

課程，性別にみると，判断次元のウェイトにいくらかの差異を認めることができる。「個性や性格」を重視する者は，小学校課程（94.2%），盲・聾・養課程（93.6%）の方が，中学校課程（83.9%）よりも多い。また，「教職への使命感や熱意」を重視する者は，盲・聾・養課程の学生（93.6%）の方が，小学校課程（84.8%），中学校課程（82.0%）

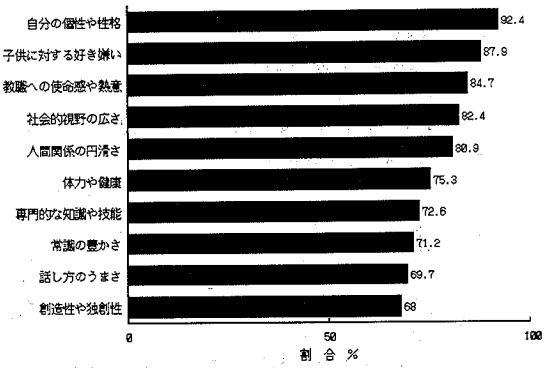

Fig 8　教員適性判断次元(自己評価で重視するもの)

よりも多くなっている。性差に関しては，中学校課程において，「人間関係の円滑さ」（女子，88.6%：男子，62.8%），「体力や健康」（女子，82.9%：男子，69.8%），「話し方のうまさ」（女子，82.9%：男子，65.1%）で，男子よりも女子の方が重視する傾向が強いようである。

つぎに，教員適性の自己評価と適性判断次元との関係について分析してみる。教員適性の自己評価と適性次元それぞれの評定値の相関係数を算出したところ，Table 9のごとくの結果が得られた。

この結果から，教員適性の自己評価と各適性判断次元の評定との関係は，課程や性によってかなりの差異が存在することが窺える。小学校課程の場合，女子では教員適性の自己評価と適性判断次元の評定との間には何の関係も認められないが，男子の場合には，教員適性の自己評価の高い者ほど「専門的知識」，「常識の豊かさ」，「人間関係の円滑さ」を重視する傾向が強い。中学校課程では，自己評価の高い女子ほど「使命感や熱意」，「社会的視野の広さ」，「専門的知識」，「体力や健康」を重視する傾向が強いのに対して，男子ではいずれの判断次元においても有意な対応関係は認められない。また，盲・聾・養課程では，女子で教員適性の自己評価の高い者ほど，「子どもに対する好き嫌い」，「使命感や熱意」を重視し，男子では，「子どもに対する好き嫌い」，「創造性や独創性」，「体力や健康」を重視する傾向が強いのである。

盲・聾・養課程で教員適性の自己評価が高い者ほど，小・中学校課程の学生よりも，「子どもに対する好き嫌い」を重視していることは興味深い結果と言えよう。

ま と め

本研究は，広島大学学校教育学部に入学してきた学生の進路決定のプロセスと卒業後の進路計画，さらには教員適性の自己評価などの一端を解明しようと試みたものである。得られた主たる結果を要約し，若干の考察を加えてみる。

まず，本学部へ入学してきた学生のほとんどは本学部を第一志望としており，第二志望も教員養成系大学・学部としている。本学部を受験対象校として最終的に決定した時期は，高校3年生段階とする者が圧倒的に多いが，受験校の決定に際しては，センター試験などの各種学力テストの成績以上に自分の個性や興味などを重視していることが明らかである。こうしたことから，本学部に入学してきた学生の多くは，巷間で言われているほどには学力成績のみで受験校を選択していないことが窺える。簡潔に言えば，卒業後の職業選択をかなり意識した受験校の決定がなされているとい

Table 9　教員適性自己評価と判断次元の相関係数

		個性や性格	子ども好き	使命感・熱意	専門的知識	社会的視野	創造性・独創性	常　識	人間関係	体力・健康	話し方
小学校課程	女子	.08	.13	.04	.03	−.02	.01	−.10	.04	.10	−.10
	男子	.20	.03	.03	.30*	.13	.14	.32*	.27*	.21	.06
中学校課程	女子	.09	−.03	.44*	.41*	.44*	.42*	.08	.32	.40*	−.15
	男子	.03	−.15	−.07	−.06	.12	.22	−.02	−.03	.16	.00
盲聾養課程	女子	−.02	.51*	.42*	.02	−.03	.08	.12	.04	−.21	.02
	男子	.14	.79*	.06	.54	.27	.78*	.58	.63	.73*	.30

*p<.05

うことである。このことは，教員への就職を望んでいる学生が圧倒的に多いことからも明らかである。こうした結果を踏まえれば，本学部のみならず教員養成系大学・学部あっては，卒業生の教員への就職状況，大学・学部の授業内容や特色などといったことに関して，可能な限りきめ細かい情報提供活動をすすめていくことが，教員を志望する高校生の進路選択を適切なものにしていくために極めて重要なこととなろう。

本研究で興味ある結果の一つは，教員になるという進路選択をしてきた学生の多くが，自己の教員適性をかなり肯定的に評価しているということである。教員養成学部の３年生を対象とした井上ら（1990）の研究においては，教員になることを志望していても，教員適性の自己評価はそんなに高くなく，また，教育実習を経験することでかなり低下していくことが明らかにされている。調査対象者が異なるために単純には比較できないが，入学時には高い自己評価をしていても，様々な講義を受けたりしていくなかで，自己評価が厳しいものになっていく可能性がある。その意味では，新入生の教員適性の自己評価がいかに変容し，その変容にいかなる要因が関与しているかを追跡的に検討していく必要があろう。この点に関しては，今回の調査対象者について大学における講義の満足度，教養部での成績などを指標として，こうした変容を追跡的に検討する予定である。

本研究では，いくつかの側面で課程差，および性差が認められた。こうした差異が一般化できるものであるかどうか，あるいはそれがどんな意味を持つかといったことに関しては，今後，新入生を対象として継続的な研究を進めていくことによって明確なものになろう。

引　用　文　献

井上　弥・石原英雄・高橋　超・石井眞治　1990　教員適性の発見と実践的指導力養成に関する研究　　広島大学教育実践研究指導センター紀要，第２号，１－６．

岩井勇児　1979　愛知教育大学学生の進路意識Ⅰ　愛知教育大学研究報告，第28号（教育科学），61－78.

岩井勇児　1980　愛知教育大学学生の進路意識Ⅱ　愛知教育大学研究報告，第29号（教育科学），83－100

岩井勇児　1981　愛知教育大学学生の進路意識Ⅲ　愛知教育大学研究報告，第30号（教育科学），49－66.

岩井勇児　1982　愛知教育大学学生の進路意識Ⅳ　愛知教育大学研究報告，第31号（教育科学），83－95.

岩井勇児　1984　愛知教育大学学生の進路意識Ⅴ　愛知教育大学研究報告，第33号（教育科学），77－94.

〔付記〕

本研究をすすめるにあたり，広島大学学校教育学部神鳥武彦教授（学校教育学部教務委員会委員長），及び学務係職員各位には多大なご尽力を賜った。ここに，記して謝意を表する。